

## 5、感謝の心

学園長国信玉三先生の教育精神を語ろうとすると、先生のご母堂をぬきにしては全きを期することはできない。たしかに、鹿児島や東京帝大時代の恩師諸先生のお教えが、先生の思想形成に大きな影響を及ぼしたであろうことも事実である。しかし、先生の全生活の根底に在るのは、「微塵のわだかまりも私心もない」ご母堂の親心であり、その思想も必ずやここに根ざしていると思うのである。

ところで、昭和十五年、国信先生は、教職に二十五年間、専心従事されたご功績により、叙勲の栄をお受けになった。しかし、その叙勲を、一番喜んで下さるはずのご母堂は、既にこの世にはおられない。先生は、その寂しきの極に、墓前に額づき勲章をお供えして、「お母さん、これは陛下から戴いた勲章



昭和56年 謝恩会の日に

ですよ」と口ずさまれた。と、その瞬間、「ああ勿体ない」と心から喜んで下さったご母堂の声なき声を聞かれたというのである。それは、まさに、不滅の親の声であり、久遠の親に接せられたということであろう。

「勿体ない」とは、有難うございます、と手を合わせることである。人はみな、一瞬だに一人では生きられないか弱い存在である。天地自然の一切の恩恵と、有縁の人々の限らない恩愛の中で、はじめて生かされているのである。毎日戴いているご飯にしても、それは、数えきれない多くの人々や天地自然のご恩によって、はじめてできることである。国信先生のお言葉を借りれば、「お米は稲という植物が作ったもの、その稲はお百姓さんが育てたもの、お米のカロリーは太陽からの贈物」というように、お米一粒だって、たべる私自身で作ったものではない。すべては、天地自然の、そしてお百姓さんらの多くの人々のご恩によるのである。ここに、手を合わせて「勿体ない」「有難うございます」という感謝の心が生まれてくる所以があると思う。しかして、この「感謝の心」で生きることを、真実の人間の道、教育の道だと感得されたのは、実に、ご母堂の声なき声を聞かされたという不滅の親に接せられたときであつたと思う。

さて、国信先生が、校長として比治山学園にご就任になった昭和十六年は、国をあげて世界大戦に突入した危急存亡のときであり、学園も経済上の危機に迫られ廃校寸前の火急のときであつた。しかし、先生は、喧噪の世相に惑わされることなく自若として学園の復興に心血を注がれたのである。しかして、その唯一の道は、教職員生徒が、うって一丸となることだとして、迷われることなく、教学のバックボーンに「感謝の心」をおき、やがて、それを基盤に五訓を考えていかれたのである。

五訓の成立は、恐らく戦後であろうが、その正直・勤勉・清潔・和合・感謝の諸徳を十全に働かしめる原動力は、申すまでもなく「感謝の心」なのである。それは、儒教の「仁」が、仁・義・礼・智・信という五常の基盤

であり、アウグスティヌスの「愛」が、節制・賢慮・正義・剛毅という四元徳の原理であるのと一つである。

かくて、「感謝の心」は五訓の原動力であるが、その具体的な内容は、子を思う親心の中にも、これにこたえる子心の中にも見られると思う。即ち、親心にこたえる子心はやがて親心に止揚されていくが、その親心と子心の心情の中に、無私無欲という感謝の実相を見ることが出来るからである。

わが学園に学ぶ諸姉は、やがてよき人の妻となりよき母親となられるであろうが、そのためにも、大慈悲によって育まれた私自身のこの命を大切にしながら、感謝の生活を送らなければならないと思う。

よき母は　よき妻なりき

よき妻は　よき乙女なりき

乙女尊し

尊いこの命を、何よりも大切にしよう。それが親心にこたえる第一歩であり、また、国信教育の出発点でもあるからである。

比治山女子短大新聞（昭・60・5・20）